

ひまわりを通して広がる福島支援の輪

ひまわりプロジェクト(※1)

シャロームは障がいがある人もない人も、共に生きる社会を目指して活動しているボランティア団体。「ひまわりプロジェクト」は、全国の支援者に育ててもらったひまわりの種を福島に送ってもらい、ひまわり油を作り、その収益金を、福島の放射線量の高い地域に住む子どもたちをのびのびと遊べる地域へ連れて行く「保養」などに役立てる取り組み。グリーンコープは各単協の施設やお店などでひまわりを育て、種を送った

ひまわり感謝祭(※2)

シャロームが、多くの支援者に感謝すると共に交流がますます深まることを願って開催している。今回で4回目



ひまわり感謝祭の会場には、全国から寄せられたひまわりの栽培記録や、福島の子を対象とした保養プログラムの様子などが展示された。左から塩月さん、北口さん



販売されていたひまわり油「みんなの手」▶

福島で新しい支援がスタート

2014年、グリーンコープは福島県の「NPO法人シャローム」(以下、シャローム)が行っている※1「ひまわりプロジェクト」に参加しました。支援団体を招いて行われた※2「ひまわり感謝祭」に参加するために12月19日、おおいた理事長 塩月恵子さんとふくおか福岡地域理事長 北口淳子さんが福島を訪れました。

福島市に向かう途中では、原発事故のため今は使われていないJR東日本常磐線の小高駅と富岡駅を視察。原発から30km圏内の川内村と、川内村の皆さんが避難している郡山市の仮設住宅を訪れ交流しました。翌20日に「ひまわり感謝祭」のシンポジウムに参加しました。

福島県川内村は福島第一原発から30km圏内の山あいの村。原発事故により、一旦すべての住民が避難を余儀なくされました。その後、村は2012年に帰村宣言をし、復興に向けて進み始めました。国による除染作業が進み、2014年10月、村の東側の一部を除いて20km圏内の避難指示が解除されました。

2014年11月現在、1573人(57.4%)が帰村していますが、高齢者が多いのが現状です。以前は仕事や買い物、病院などを富岡町(現在は居住制限区域)に頼っていたため、帰村しても生活が成り立たないと考える住民も多く、特に子どもを持つ若い世代は放射線による健康被害を心配して戻って来ていません。また、NPO法人によ

る川内村でのキッチンカーの移動販売も行われ、帰村した住民に温かい料理やお惣菜が届けられています。今後はメニューが増えるように、財団で支援している石巻市高橋徳治商店のはんぺんや蛤浜・折浜の牡蠣を食材として紹介します。

キッチンカーを利用した福島での支援が始まる

ひまわり感謝祭で福島の現状を知る

東京電力福島第一原発の事故による被害のようす

避難指示解除準備区域の小高駅では、大震災当日の朝、通勤や通学のため乗ってきた自転車がそのままになっている

居住制限区域の富岡駅周辺の様子。津波によって壊れた建物やひっくり返った車が放置されたままになっている

除染作業がいたるところで行われており、剥がされた土や草の入った黒い袋が道路脇にたくさん積まれている

ひまわりプロジェクトは、ひまわりを育てて種を採って被災地に送る全国の支援者と、それを必要としている福島の人たちが繋がっていると実感し共

感することの意味がある」という内容でした。パネルディスカッションでは、原発事故後すぐに福島に入って被災者の医療相談に当たった医師が、福島の子もたちに

甲狀腺がん多発の心配があると報告しました。また、シャロームのメンバーから、ベビーカーに放射線測定器を付けて、実際に子どもに影響がある高さでの空間放射線量の測定を継続している様子が報告されました。

立場の者が幸せに生活できることが、本当にいい社会になること」という話と重なり、本当にそのとおりだと思いました。福島での現状を見て胸が痛くなり、私たちが忘れずにいることが大事だと感じました」と福島

の現状に触れての思いを語りました。

温かい料理がキッチンカーで届けられる



福島視察を共同理事会会で報告

北口さんは「シャローム代表の大竹さんから『今、福島は日本で一番弱い所なので、弱い所が元気になれば日本はとってもし幸せになると思います』という話を聞きました。福島に発つ前の福祉活動組合員基金の助成団体報告会で聞いた『弱い